

いずれも乳がんを発見するために有用な検査です

マンモグラフィとはどのような検査ですか？

マンモグラフィとは、乳房専用のX線撮影装置を使用しアクリルの圧迫板で乳房を片方ずつ挟み込んで、縦横の2方向から計4回撮影を行う検査です。

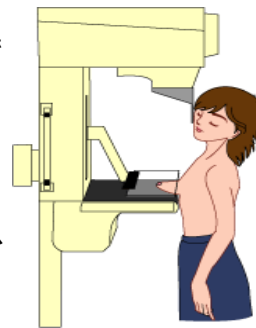
乳腺の密度が比較的低い40歳以上で、早期発見の貢献度が高い検査です。

長所：超早期での発見が可能です。

小さなしこりや乳がんの初期症状である「微細な石灰化」を写し出し、**早期に発見**することができます。

短所：乳房を挟むときは、多少の痛みをともなう場合があります。

少ない放射線の量でしこりをはっきり写すために、乳房を圧迫してできるだけ薄く引き延ばしますので、その際に痛みを伴う場合がありますが、いつまでも痛かったりするようなことはありません。また、放射線を使用するため、妊娠中は検査が受けられません。



乳房超音波とはどのような検査ですか？

乳房超音波検査とは、乳房に超音波を当て、反射してくる波(エコー)を画像化し、その様子を診る検査です。横になり、乳房にゼリーをぬってから、乳房の上で超音波を出す機械を動かします。

長所：触診では見つからないごく小さな「しこり」の発見が可能です。

小さなしこりや、マンモグラフィでは発見しにくい乳腺の密度の高い**若年者(20~30代)の「しこり」**を写し出すことが得意です。放射線を使用しませんので、妊娠中でも検査が受けられます。

短所：超微細石灰化を伴う病変は写らないことがあります。

マンモグラフィで発見できるような微細石灰化を見つけるのは、超音波の特性上、不得意です。



どちらの検査を選べば良いですか？

20~30代の方では、乳腺の密度(乳腺量)が高く、マンモグラフィでは詳細に判断できない場合がありますので超音波検査が有用です。しかし、2~3年に1回はマンモグラフィを併用した検診をお受けになることをお勧めします。

40歳以上の方は、1年に1回はマンモグラフィを、また、マンモグラフィと超音波検査の両方を隔年で受けるようお勧めします。

年齢を問わず乳腺密度には個人差がありますので、できれば初回はマンモグラフィと超音波検査の両方を受けていただき、ご自身が今後どのような検査をどのぐらいの間隔で受けるべきかを、医師に相談されるのも良いでしょう。

乳がんにかかる日本人女性は年々増加の傾向にあり、今や16人に1人が乳がんにかかるといわれ、女性のかかる「がん」のトップになりました。これは、学生時代のクラスメートの1人か2人は乳がんになることを意味しており、決して人ごとではありません。また、乳がんの発生は20代からみとめられ、20代後半から増加し、40代の女性にいちばん乳がんが発見されています。つまり20代からが「乳がん年齢」と言えます。しかし、幸いにも乳がんは治り易い「がん」のひとつに数えられ、**早期に発見して適切な治療を受ければ、死に至らない「がん」でもあるのです。**

したがって、早期発見のためには精度の高い乳がん検診を年に一回は受診されることが大変重要です。

マンモグラフィや超音波検査は、装置の精度、技師の撮影の仕方、医師の読影(画像を見て、異常があるかないかを判断する能力)などで結果が左右される検査です。したがって、学会などが定める一定の基準を満たして認定を受けた医師や技師のいる施設で検査を受けることをお勧めします。

当センターは、日本乳癌検診学会を中心に構成されている、マンモグラフィ精度管理中央委員会の施設・画像評価委員会より、**評価基準に合格した施設として「施設・画像認定」を取得しています。**また、読影担当の医師はもちろん、撮影担当の技師も認定を取得した女性技師が検査を行いますので、安心して受診いただけます。